物語りと私
～内面を確かめる言葉

●半沢直樹とあまちゃん

毎年、年末になると、その年の新語・流行語大賞が発表になります。2014年の年間大賞は「ダメよ～ダメダメ」「集団的自衛権」でした。あなたの予想と重なるものでしたでしょうか?

ちなみに、2013年の年間大賞は「今でしょ!」「お・も・て・な・し」「倍返し」「じぇじぇじぇ」。年間大賞に4語が選ばれたのは史上初だそうです。

「倍返し」はTBS系列で放送されたドラマ『半沢直樹』の主人公が反撃するときのセリフです。私は、家にいない週にはこのドラマを録画して観ていたほどでした。

「じぇじぇじぇ」はNHKの連続テレビ小説『あまちゃん』の中で多用されましたが、岩手県三陸地方の方言で、驚いたり戸惑ったりしたときに発します。こちらは、家の者がほぼ毎日録画をしていたので、かなり見ました。

私がテレビをあまり見なくなって10年くらい経ちましたが、これほど、連続テレビドラマを熱心に見るのも、久しぶりです。いったい、何がおもしろく、私たちを惹(ひ)きつけたのでしょうか。

「これって、ありえないよ、嘘だろ!」という思いが生まれるほど、どちらのドラマにも、いかにも、「これは、物語りとして描かれた虚構の世界の作り事です」という不文律を基に作られていました。

「倍返し」や「じぇじぇじぇ」の決めゼリフの繰り返しは、日常生活とは違うものです。だから、かえって「安心」して、「物語り」として楽しめたのではないでしょうか。

しかし、そう思う反面、どちらのドラマも、ストーリーの展開の見事さだけでなく、人間がゆっくりと問題に向き合うときの感情が深まる場面を細やかに描いていました。だから、こんな生き方こそ大切だったな、自分はこういう道理を忘れているんではないだろうか、と「内面の世界」に切り込んでくる「何か」を思い起こさせたのかもしれません。

●『星の王子様』再読

私は今、約40年ぶりに『星の王子様』を読みなおしています。飛行機乗りでもあるサン=テグジュペリというフランスの作家が残した、とても有名な作品です。王子様が出遇うさまざまな登場人物のなかで、一番私のこころに残っていたのは、「キツネ」でした。高校時代に書いた『星の王子様』の読書感想文を振り返っても、キツネとのやり取りを取り上げていました。

> キツネは、いいます。〈飼いならす〉とは、〈仲よくなる〉ことだ。それは、「あんた」(王子様)が、ほかの十万もの男の子と変わらないし、おれも「あんた」から見れば、十万ものキツネと同じだけれど、飼いならすと、おたがいに、はなれちゃいられなくなる。あんたは、おれにとって、この世でたったひとりの人になる、おれは、あんたにとって、かけがえのないものになる。あんたが友だちがほしいなら、おれと仲よくするんだな。それには、しんぼうが大事だ。最初は、はなれて草の中にすわる。おれはあんたをちょいちょい横目でみる。あんたは、なにもいわない。一日一日とたってゆくうちに、だんだん近くにすわれるようになる。いつも、おなじ四時にくるほうがいい。すると、おれは三時には、うれしくなりだすんだ。四時には、おちおちしていられなくなり、幸福のありがたさを身にしみて思う

というやり取りのあと、次のセリフがあります。

> 「なに、なんでもないことだよ。心で見なくちゃ、ものごとはよく見えないってことさ。かんじんなことは、目には見えないんだよ」(『星の王子様』岩波書店、99頁)

今回も、キツネの示唆に富んだことばは、たいそう自分のこころに残りました。しかし、キツネ以外にも、すいぶん印象深い話を物語る登場人物がいることに気づきました。私のこころが高校時代よりも少し変化し、あるいは成長したからでしょうか。それらの登場人物は、理論で道理を説明するのでなく、それを聞く自分のこころの動きを通して、この世にあまねく、人がうなずけることを物語っているのでした。

●物語を通して道理に出遇っていく

他人事(ひとごと)を語るときは、客観的な表現、つまり名詞で語ることができます。しかし、自分のことを語るときは、主体的な、私を主語にした動詞でしか語れません。

心理学者の河合隼雄さんは次のように言います。

> 私たちは、自分が抱える内面の問題を、外の世界と関係付けて、何とか納得し、理解し、意味を見つけようとする時、「物語り」をするというのです。

たとえば、「烏(からす)はお母さん、お母さんと鳴いてるんだね」と子どもが物語りをする時に、その子は、自分の周りの世界の出来事を、自分の視点から意味付け、しかも自分自身の気持ちを納得させることにもなっています。つまり、何かあると「お母さん、お母さん」と呼びたい、その子自身の気持ちも反映して、自己納得しているのだといいます。そう考えるとずいぶん広がりと深さをもって物事を見ることができますね。

ところが、大人になっていくにつれ、外の世界との関係や情報が増えます。すると人間の内面の作り出す「物語り」だけだと、だんだん辻褄(つじつま)が合わなくなります。大人になっても、「烏さんはお母さんと鳴いてるね」と言っていては、KY(空気読めない)です。

それで、外の世界の理屈だけで「説明」するほうが便利だと思い始めます。それは、物理学や生物学などのような「大人」の説明です。これは客観性や正確さからいえば、とても効率的です。それで社会が「大人」になると物語りに所属する宗教が廃れてきました。

科学の言葉は便利なので、それで世の中の出来事を説明することに、私たちの目が向きがちです。ところが、科学の言葉には、どうしてなんだろうという、私の内面にある気持ちを丁寧に説明することができません。たとえば、先の子どものように、自分の素朴な問いかけと結びつけて納得することができない言葉になります。簡単にいえば、冷たい言葉となってしまいます。(参照:河合隼雄「物語りとふしぎ」岩波書店)

「なぜ、我が子は死んでしまったのか」という問いに、「急に車道に飛び出して、交通事故で、内蔵破裂と外傷性ショックで死亡した」という科学的な説明は、「なぜ、うちの子に限ってこんな目に遭わなければならないのか。(そして、この私が、どうしてこのような巡り合わせに遭わなければならないのか。)」というその母親の内から生まれる問いかけには、ほとんど意味を持たない答えになっています。科学の「説明」だけでは「私を生きる」とか「生きる意味」という、一人ひとりの内面を納得することができないのです。言い換えたら、私たち一人ひとりの内面には、物語ることで、自分の生きる意味を明らかにしたいという、深い宗教的ともいえる、問いかけがあるとも言えるでしょう。

どんな時代の人も、物語りを通して、自分と世界の関係を確かめ、さらに自分で納得できる道理を学んできたのでしょう。それは今も、ドラマや文学の物語りを通して、一人ひとりの生きる意味を、お互いが確かめようとしている、そのように思えてなりません。

宗教を伝える言葉が、「物語り」であるのはこういう意味があるのだと思います。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳(本多 靜芳)

※ご縁のあったあなた!　第一水曜午後六時半の法話会「ナムの会」で『正信念仏偈』を、第三日曜午後六時半の「聖典勉強会」で『親鸞聖人御消息集』を学びにいらっしゃいませんか?　お待ちしてます(会費はいずれも資料・茶菓代として千円です)。

「ナムの会」は一月と八月は休会し、十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります。「聖典勉強会」は八月と十二月は休会し、その他、行事によって休会があります。

草木国土悉皆成仏
～仏になる可能性

●ハナキン～毎週金曜の晩は

今はすでに、過去の言葉になった「花金（ハナキン）」です。都市型化した地域などのディスコに、華やかないでたちの人びとが集まる姿を取り上げ、風物詩となりました。しかし、バブル崩壊と共に無くなったのかしれません。

ところで東日本大震災以来、毎週金曜日の晩、人びとがある意味で自主的に首相官邸の前に集うことで、脱原発の抗議行動をしています。私は、まだ一度も、参加したことはおろか、見物に行ったこともありません。

今年の3月には、四万人の参加者があったと記されていました。昨年、2012年7月においては、大飯原発再稼働反対に集まった人びとは20万人で、総理官邸前や国会議事堂周辺を埋め尽くしました。実は、このときは、私、たまたま車で官邸前を通り過ぎ、その数の多さに驚きました。

島根県に行く機会が2014年にありました。お坊さんたちとの会話で話題になったのは、中国電力島根原発の再稼働を反対する署名が、1万人を超えたという話でした。ちなみに、島根県の人口は、約70万人です。少し調べると、2013年10月23日の毎日新聞サイトには、次のように記されていました。

> 島根県内の住民グループが22日、脱原発を柱としたエネルギー基本条例制定を県に直接請求するための署名活動を始めた。大阪市など全国四カ所で原発再稼働の是非を問う住民投票条例が直接請求されたが、いずれも議会で否決されている。
>
> グループは「島根原発・エネルギー問題県民連絡会」（代表世話人、北川泉・島根大元学長）。循環型社会の実現や計画的な脱原発を明記した「県エネルギー自立地域推進基本条例」の実現を目指す。
>
> 地方自治法の規定で、県条例を直接請求するには二カ月間に有権者の五〇分の一以上の署名（島根県は約一万二〇〇〇人）を集める必要がある。
>
> 事務局の保母武彦・島根大名誉教授は「国が地方にエネルギー政策を一方的に押しつけた結果が福島の事故。地域に合ったエネルギー政策を考える仕組みを作りたい」と話す。【曽根田和久】

●仏性ということ

仏教の言葉で、仏性があります。仏、つまり、目ざめた者となる可能性といえば、間違いではないと思います。

遠くインドの仏教では、さとりを深めれば「仏性（ぶっしょう）」（仏に成る可能性）、「如来蔵（ぞう）」（如来になる蔵）があると見届けました。つまり、あらゆる衆生（しゅじょう）、有情（うじょう）、つまり人間をはじめ感情を持つ全ての動物、すなわち人間をはじめとする感情を持つすべての動物が、仏になる可能性をひとしくもっていると教えたのです。

これが、中国仏教に至ると、仏道を徹底すれば、「草木礫塵（れきじん）、各一仏性」などといい、非情（ひじょう）という感情のない草木や土石までも、この仏性をもっていると考えられるようになります。それは、私たちが仏教の理解を深め、「さとり」を覚悟し、あるいは、信心が開かれれば、一切の衆生だけでなく、草木礫塵（こいし・ごみ）など一切の非情にも仏性があるといえるし、それらはついに成仏すると説いています。

さらに、仏教が日本に伝わると、これが受け継がれ、深まり、日本の古来の自然観とも重なり捉えられて、より徹底されます。最澄さまや空海さまは、いずれも「草木国土悉皆成仏」といい、国土という抽象的概念の一切にも仏性が具わり足りていることを認めています。親鸞さまも、その著である『唯心抄文意（ゆいしんしょうもんい）』（異本）に、見られます。道元さまも、『正法眼蔵（しょうぼうげんぞう）』「仏性」において、「草木国土これ心なり、心なるがゆえに衆生なり。衆生なるがゆえに有仏性なり。」と語っておられます。

つまり、信心（浄土教のさとり）や「さとり」を徹底したならば、如来（仏そのもの）はあらゆるものの心（いのち）に満ち満ちており、草木や国土までが成仏すると見届けています。ということは、つまり、草木も国土（この場合、世間、社会という意味）も、さとってないのですから、迷っているという認識です。

梅原猛が反原発の思想として注目するのも、この仏性という言葉です。

●かならず仏に成る可能性

映画『セブン・イヤーズ・イン・チベット』（1997・アメリカ）に印象深い逸話がありました。西欧人の主人公が、チベットに滞在した間に、幼少期のダライラマ14世法王猊下と交流を持ち、現地の人びとの仏教的な生き方に新鮮さや、違和感を持ちながら出遇って行くのです。その中で、仏教に基づく人びとの生き方に出遭い、主人公が驚くのです。

私の記憶では、その場面とは、チベットのラサに、映画館を作ろうということになり、場所を決めて、設計図を作り、工事を始めるのですが、建物ができるどころか、聖地さえもできていかないのです。どうしたものかと、主人公が現地を見に行きます。すると、現地の作業員が土を掘り起こすと、地中からミミズが見つかるのです。そのミミズを土ごとすくい上げて運びだし、近くの森の中におろしてやり、見送っているのです。そのシーンを見ながら私は、これは仏教の伝わる文化だからこそ生まれたものだと思いました。先にいうところの「仏性」を見出した姿なのだと、教えられました。

仏教の教えを日々、生活習慣として生きていけば、かならずかならず、そこにあらゆるものの「仏性」が見えてくるのだと教えられます。そうすれば、自然破壊という言葉で今、論じられているものも、ブルドーザーで大地を削る時、すでに何かの自覚を生み出すのではないでしょうか。この大地に、この山に、この海に、「仏性」が宿っていると思い当たれば、合掌をすることになります。合掌したらば、そこに、仏教的な新しい人生態度が生まれるでしょう。そして、仏教的な自然に対する態度が生まれるでしょう。それと同じように、私たちの作り上げている「社会」「世間」にも、「仏性」があると思い当たれば、この「政治状況」にも、この「為政者」にも、いつか必ず仏の教えに目ざめる可能性があると思い至り、可能性のないものとしてあきらめるのではなく、きっと必ず、真実に目ざめていくだろうという思いが、私の中に生まれます。それは、丁度、毎週金曜日に首相官邸に集まる人が頂く願いとつながるものでもあると思わずにおれません。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後六時半の法話会「ナムの会」で『正信念仏偈』を、第三日曜午後六時半の「聖典勉強会」で『親鸞聖人御消息集』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。

「ナムの会」は一月と八月は休会し、十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります。「聖典勉強会」は八月と十二月は休会し、その他、行事によって休会があります。

優しさの連鎖
～菩薩を生きる

●「情けは人のためならず」

「失意のどん底に在る人に同情の手を差し寄せるのはもちろん純粋な動機に基づく事で他意は無いが、やがて、自分が逆境に立ったときには、相手から救いの手を差しのべられることにもなるものだ」
（三省堂『新明解　国語辞典第五版』）

この諺（ことわざ）は、誤って用いられることが多く、「情けをかける事は本人自立の為に良い結果をもたらさないものだ」（三省堂『新明解国語辞典第五版』）と解釈する人が多いといいます。2012年3月の文化庁の月報に掲載された「国語に関する世論調査」によれば、本来の意味を選んだ人と、「本来の意味ではない『人に情けを掛けてやることは、結局はその人ためにならない』を選んだ人との割合は、ほぼ同じという結果」だとありました。さらに同調査で、「年代別のグラフを見ると、60歳以上を除く全ての年代で、本来の意味ではない」意味を選んだ割合が多いと指摘しています。

ところで大阪大学のウェブサイトによれば、同大学大学院人間科学研究科の研究グループは、5～6歳の幼児の日常生活においても、人に親切にしている子どもは、その後、その親切な行為を見ていた他の子どもから親切に関わってもらうことが多くなることが確認されたといいます。専門用語では、「社会間接互恵性」というそうですが、「情けは人のためならず」が幼児の人間関係にもあるということです。

他者に対して、親切で優しい行動をするのを見ると、人はその親切な行動をしている人に対して、優しく接しようと思うのでしょう。その報告の中にも指摘されていましたが、人間は、普段の生活で困っている人を見ると、知らない人でも助けたいという衝動にかられたり、親切を行う性質を持っているそうです。そして、動物の中でも、こうした利他の精神は、人間の独自なものだそうです。

すると、私たちの先天的生得的な一面にこうした利他の傾向があるのでしょう。しかも、先の研究にあるように、そうした利他の行動を目の当たりに見ることで触発されて、具体的な行動となるということは、後天的学習的な側面が大事な要因だといえると思います。

●人とのつながり

日本イラク医療支援ネットワーク（JIM-NET、以下、ジムネット）は、1991年の湾岸戦争以降、ガンや白血病の子どもたちが増えているイラクで医療支援をしている団体で、鎌田實（みのる）医師が代表を務め、2004年に設立したNGOです。私の関わるアーユス仏教国際協力ネットワークとのつながりも深いため、2005年にジムネット事務局長の佐藤真紀さんと出遇い、2007年には現地スタッフでイラクの病院内学校の先生も務めるイラク人のイブラヒムさんが来日中に、私の寺を訪ねてくれ、本堂に集まった人びとの前で、戦争で、傷つき、悲しみ、苦しんでいる人びとの話をしてくれました。（ジムネットのサイト参照）
http://blog.livedoor.jp/jim_net/archives/50960407.html

ところで、2015年2月4日、参議院議員会館緊急集会「私たちは人質問題をどう考えるか」での佐藤事務局長の発言で、後藤健二さんとジムネットとの接点を知りました。

佐藤氏の発言を要約すると、以下のとおりです。

「ジャーナリストが最前線での状況を伝えてくれ、それでNGOが支援につなげていくという協力関係が出来ている。2004年、イラクでの活動が危険になり、ヨルダンでの支援活動が始まった時、後藤さんが取材をしてくれた。偶々（たまたま）、その時期、妊娠している妻が白血病で、抗がん剤治療か、お腹の子を育てるかという厳しい選択を迫られていたのが夫のイブラヒムだった。ヨルダンの緊急癌センターへの受け容れ、俳優ポール・ニューマンの支援救急車で入院、未熟児の双子が帝王切開で誕生、そのまま入院し抗がん剤治療。丁度、バグダッドから戻った後藤さんに彼らの面倒を頼んで事務局長は帰国。年明けてイブラヒムの妻は亡くなるが、最期の様子を後藤さんはカメラを回し続けた。家族も居ず誰も手伝ってくれる人のないヨルダンで妻の葬式。後藤さんが棺を担いで車に乗せ、イブラヒムがイラクに帰るのも助け、経済的な支援もしてくれた。イブラヒムにとって後藤さんの存在は大きく、精神的にも支えになってくれた。戦争は、人が殺し合い、家族の憎しみは残り、新たな戦争を生み、テロの動機になるのかもしれないが、後藤さんやヨルダンの人たちの優しさに触れ、イブラヒムはイラクに戻って自分も人道支援の仕事をすると言ってジムネットの現地スタッフとして活動をしてくれるようになった。人の温かさ、親切はぐるぐると巡っていく。戦争に打ち勝つためにはそういう連鎖を続けていくしかない」

●自利利他の菩薩の願い

仏教が展開して、大乗仏教という運動の中で、菩薩という生き方が尊ばれます。菩薩とは、仏の教えに出遇い、自らも真理・真実を求め、自利と利他に生きようと願う者をいいます。自利利他とは、自分の利、「さとり」を目指すこと、他者の利、すなわち、人びとの救いを目指すことです。こうした自利と利他を求める菩薩たちの共通の願いを、のちに「四弘誓願（しぐぜいがん）」と表すようになります。

「衆生無辺誓願度（しゅじょうむへんせいがんど）
煩悩無数誓願断（ぼんのうむしゅせいがんだん）
法門無尽誓願学（ほうもんむじんせいがんがく）
仏道無上誓願成（ぶつどうむじょうせいがんじょう）」
（苦しみ悩む人は多いけれど最後の一人まで救おう、私の抱える自己中心性は限りないけれど最後の一つまで無くしていこう、学ぶべき理想の教えは泉のように湧いてくるけれど残らず学んでいこう、崇高な生き方はこの上ないけれど必ず完成を目指していこう、試訳）

菩薩の一人、阿弥陀仏の前身である法藏菩薩は、その四十八にわたる願いで繰り返して、「若不生者（にゃくふしょうじゃ）、不取正覚（ふしゅしょうがく）」（もし、悩み苦しむ人びとが、新しい救われた生き方を完成できないならば、私は正しい「さとり」を開いたことにはなりません）と『無量寿経』の本願で表明します。つまり、あなたが救われなければ、私も救われないという生き方です。

これは、「社会間接互恵性」のように、「私も、人びとを救う菩薩として生きよう」という、次の菩薩を生み出します。後藤さんも、イブラヒムさんも、そしてそれに関わるあなたも、あなたも菩薩と成っていく無限に続く運動体を自利利他の精神が生み出すのです。この精神から生み出されるのは、もちろん「武力で平和は作れない」、「報復の連鎖はやめて」いこうという生き方になります。そして、「テロとの戦い」を声高に叫び、自衛隊を派遣してでも、戦闘行為で問題解決しようという主張とは正反対のものが菩薩の生き方です。

なお、本日（2015年2月11日）、下記のサイトを発見して、改めて深い思いを持ちました。
http://blog.goo.ne.jp/shirakabatakesen/e/7a90bc389e3017dcc94571a00520de9a

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後六時半の法話会「ナムの会」で『正信念仏偈』を、第三日曜午後六時半の「聖典勉強会」で『親鸞聖人御消息集』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と八月は休会し、十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります。「聖典勉強会」は八月と十二月は休会し、その他、行事によって休会があります。

何を安らぎとするのか
～「オンカロ」と向き合う

●やられたら、「倍返し」なのか?

「やられたらやりかえす。倍返しだ!」
　2013年夏に放送された人気ドラマ「半沢直樹」で、主人公の半沢直樹が憎い上司に反撃するときに言い放つ決めゼリフです。「倍返し」は同年12月、2013年新語・流行語大賞の年間大賞に選ばれました。
　このセリフを聞いて、「目には目を、歯には歯を」という言葉を思い起こした方もいらっしゃったと思います。これは、イスラームの根本聖典『コーラン』にある聖語の一部です。調べてみると、それ以上の報復をとどめさせるものであり、さらに、このあとの部分に、「その報復を控えて許すならば、それは、自分の罪の償いになる」という言葉があるそうです。
　私は、「目には目を、歯には歯を」という聖語は、目や歯を傷つけられても、報復は目や歯だけにとどめなさいという意味だと学んできました。よく考えると、やられただけ、やりかえしなさいということは、確かに情緒を押さえる宗教的な言葉ですが、それだけで終わるのならば、世間の報復感情の延長線でしかなく、世界宗教の言葉とはいえないかもしれません。しかし、「報復を控えて許す」という言葉に、とても深く、そして、世俗の発想を超えた世界宗教としてのイスラームの世界があるように教えられました。
「やられた」と心が揺さぶられると情緒的に報復という感情が生まれます。しかし、報復することで人間の抱える苦しみや辛さや悲しみを解決できるかのように考えるのも、よく考えると、短絡的な感情かもしれません。世界的な普遍性のある宗教は、報復することが、決して、道理にかなったあり方や、生き方にはならないと教えています。それは、人間の情緒に振り回されるあり方を見据えているように思えてきます。もちろん、情緒や一般の感情を否定しましょうということではありません。
「やられたら、やりかえす」というセリフが流行ったのには理由があると思います。しかし、自分自身、仕返しをして、しなければよかったという気持ちになったり、自己嫌悪を覚えたりします。私の内なる半沢直樹も、あとで悩むのでしょうか。

●『100,000年後の安全』

　2014年1月22日から2月10日までの間にYouTubeで期間限定で公開された映画『100,000年後の安全』(日本語吹替版)本編(約75分)を観ました。デンマークのマイケル・マドセン監督が共著し、監督をした長編ドキュメンタリー『100,000年後の安全』(原題:Into Eternity「地下深く 永遠に ～10万年後の安全～」)は、フィンランドで作られた最終核処分施設「オンカロ」開削(かいさく)を撮影し、専門家がインタビューされているものです。
　放射性廃棄物の放射能レベルを無くしたり減らしたりする技術は今のところありません。放射能が生物にとって安全なレベルまで下がるにはおよそになるのに必要な年数は、約十万年(アメリカでは、百万年)といいます。
　高レベル放射性廃棄物の処分方法は、安定した地層の地下深くに格納するのが唯一の解決法だとして、世界で初めてフィンランドが場所を決定し、最終処分場施設を作る作業を進めています。「オンカロ」とは、フィンランド語で「隠し場所」を意味し、同国オルキルオト島にあります。地下520メートルの深さまでトンネルを掘り、そこから横穴を広げ放射性廃棄物を処分していきます。2020年までに運用を開始、その後2120年頃まで百年間にわたり埋設処分のために利用される予定で、百年後に満杯になった後は、道を埋め完全に封鎖します。そして、十万年にわたって「オンカロ」は地下に封鎖され続けます。
　核廃棄物を取り上げながら、糾弾するという視点でなく、極めてセンスのよい映像と描き方で、しかも、地層下処分ということの意味論的困難さ、つまり「オンカロ」は「忘れなければならないことを決して忘れてはいけない……」ということにまで向けられ、この貯蔵所が遠い未来の人間にとって近づいてならない危険なものとして示しています。
　つまり、密閉され、忘れなければならないのに、そのことを決して忘れてはいけない。矛盾を抱えた問題を、そのまま映画を見ている私たちに問い返されるのです。

●「さとり」の智慧と慈悲

　映画の中で、専門家たちがインタビューされる項目の一つに、果たして十万年後の“人類”が、この施設を発見した時、ここが危険であると分かる伝達手段があるかという問いに向き合います。言語も通じなければ、意思表示以前に思考形態すら別かもしれないという意見がでます。それは丁度、十万年前の“人類”と現代の私たちの意志が伝わるかという問いとなります。その頃の“人類”は、アフリカとヨーロッパの一部にいた類人猿で、マンモスを原初的な武器で倒していたといいます。言葉どころか、核廃棄物という概念を伝える手段すらないのと同じで、十万年先の“人類”にも伝えられないと推論します。
　私は、浄土教の深い信心から生まれた、善導大師(613～681)の聖語をふと思いました。「自身はこれ現に罪悪生死の凡夫(ぼんぶ)、曠劫(こうごう)よりこのかたつねにしづみつねに流転(るてん)して、出離(しゅつり)の縁あることなき身と知れ」(『散善義』)ここには、曠劫という過去世から、苦しみ悩んできたいのち、そのいのちと自分を重ねているからこそ、それらへの同感同悲があると知れてきます。それは私に届いている真実の「いのち」の働きとの出遇いでもあります。
　マンモスを狩猟する人びとの心に起きる、苦しさや辛さや悲しみをわが事として受けとめる深い智慧と慈悲が、釈尊の「さとり」ではなかったかと思い当たりました。「忘れなければならないことを決して忘れてはいけない……」という言葉は矛盾しています。しかし、矛盾を抱え込む存在をどこまでも透徹した「さとり」の智慧の眼で見つめるとき、そこに同体といわれる、相手のいのちと自分のいのちを重ねる慈悲が生まれていきます。

> 「実にこの世においては、怨(うら)みに報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みの息むことがない。怨みをすててこそ息む。これは永遠の真理である」
> 「ブッダの真理のことば・感興のことば』(中村元訳・岩波文庫)

　怨みに近づいてはならず、怨みをすてることを教えられ、教えに基づく生活習慣の行を続けていくことにのみ、この聖語は初めて実感されるように思えます。その実感を持つところに、曠劫の昔の私の迷いのいのちと、そして、曠劫の先の私の仏のいのちも又見えてくるようです。何を私は安らぎとしているのか、それは仏教者にとって、仏の聖語に基づく私の生き方そのものが生み出すものでしょう。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳(本多 靜芳)

※ご縁のあったあなた!　第一水曜午後六時半の法話会「ナムの会」で『正信念仏偈』を、第三日曜午後六時半の「聖典勉強会」で『親鸞聖人御消息集』を学びにいらっしゃいませんか?　お待ちしてます(会費はいずれも資料・茶菓代として千円です)。
「ナムの会」は一月と八月は休会し、十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります。「聖典勉強会」は八月と十二月は休会し、その他、行事によって休会があります。

貧困国としてのニッポン
～大乗菩薩の歩み

●紙の中に雲が見えるか

2013年12月から2014年1月までNHK･Eテレで放送された『趣味Do楽　落語でブッダ～落語がわかる　仏教が楽しくなる』では、講師の釋徹宗（しゃくてっしゅう）さんが、「仏教の縁起」という道理の教えを説き明かすために、ベトナムの出身でディープエコロジーの啓発をしている僧侶、ティック･ナット･ハーンさんの講演のお話を紹介していました。

ハーンさんは、一枚の白い紙を取り出すと、
「みなさん、この紙に雲が見えるでしょうか」と尋ねます。
「雲がないと、雨が降りません。
雨が降らないと、木が育ちません。
木が育たなければ、パルプが抽出されません。
パルプが抽出されないと、紙ができません。
一枚の紙の中に、雲が見えてくるのが、仏教のいう縁起という相互存在関係（Interbeing）のことです。」

そうすると、私の存在は、雲や海という分かりやすく想像しやすいものだけでなく、普段は気づかない色んなこととともつながっているのですね。というよりも、本当は、すべてがつながっているんですが、私たちはそんなことは気にしないで、自分の都合の範囲、それも非常に狭いところで、ものごとを見ているような気がしてきました。

●日本は貧困大国?

アベノミクスという、10年も経てば風化しているような言葉が、かまびすしくマスメディアを席捲している同じ日本で、「子どもの貧困率」は6人に1人です。

貧困率という言葉を耳にするようになったのは、長妻昭元厚生労働大臣が国会で取り上げた頃（2010年頃）からです。貧困とは、所得が国民の年収の平均値の半分に満たないことをいい、その人口に対する割合が、貧困率となります。

ところが、何をもって、年収とするかは、問題があります。アベノミクスを謳（うた）う政治家は、国民総所得を、国民の年収と重ねて説明しましたが、企業を含めた国の総所得と、国民の年収とはまったく別のものです。

さらに、平均年収も問題です。国税局は、2013年の給料受給者の平均年収を409万円と発表しました。国税庁「民間給与実態統計調査」では、民間の従業員（約5400万人）を対象として、全員の給料を足したものを人数で割り、平均年収とする算出方法をとります。この方法では給与額が平均値より突出した人も当然計算に関わり、平均が上がります。例として、年収120万円の人が19人でも、年収1億円の人が1人いれば、二十人全体の平均年収は620万円となります。つまり、年収1億円の人が国民の5%なら、残り95%が年収120万円でも平均年収は620万円になるような算出方法なのです。

いずれにせよ、その平均年収の半分以下の貧困世帯の十八歳未満の子どもが、15.7%だというのです。（なお、厚生労働省が「国民生活基礎調査（2009年）」をもとに算出した「貧困」の目安は4人世帯で250万円、3人世帯で217万円）

別の定義では、貧困とは、1日あたりの生活費が1ドル未満の衣食住がままならない「絶対的貧困」と、その地域で平均よりも著しく低い「相対的貧困」に分けられます。それで、日本では餓死する子どもはいなくとも、相対的な貧困という状況なので、文化的な暮らしを送っていくのに必要な収入がないことから、修学旅行に行けない、学費を出す余裕がなくて高校や大学に進学ができないなど、食べるのが精一杯という困窮さとして現れています。

●菩薩の願い～同体の慈悲

“仏さまのような方だ”と聞くのと、“神様のような方だ”というのでは、ずいぶんと印象が違います。「仏」と聞くと、離れずに、一緒にいてくださる温かさを私は覚えます。

「仏」とは、人間が人格を成長し完成した姿で、誰でも因縁が整えば、その行（生活実践）によって仏に成るので、仏と衆生（しゅじょう）はつながっているのです。これを一元論といいます。それに対して、一神教の神とは、他の存在とは別に、それ自身だけで存在するもので、人間は神になることはありません。これを二元論といいます。仏と神はまったく別のあり方です。

仏さまや、その「さとり」を目指す菩薩は、智慧と慈悲を身につけることを自らの願いとして求めます。智慧とは、無分別といい、人間の価値で物事を分別しない認知を持つこと、つまり、相手と私を分けない、同体だと見届けることです。慈悲とは、そのように相手の身になって考え、行動することをいいます。仏という人格完成の姿は、相手と私のいのちを分けず、繋がり合っているから、もともと一つであるというものの見方に立ちます。今は迷いの存在でも因縁によってやがて仏に成る。別のものではないからこそ、相手の身になって行動する慈悲となります。これは仏教が、一元論の立場に立つからです。

例えば、精進料理というのは、私のいのちと同じだけ尊い相手のいのちが見えてきたから、せめて、仏事や親の命日などには、殺生をしない生き方をしようとした態度です。

確かに、私たちは、いつも相手の身になって考えたり行動したりすることはできませんが、相手のことを考えないで自分のことしか考えないあり方に開き直ることもできません。仏教の「さとり」や信心を生きるとは、煩悩（自己中心）に開き直ることもでもなく、また、自分だけの「さとり」や信心に止まること（自己だけの完成）でもありません。

無着菩薩（320～400頃）と天親菩薩（320～400頃）という大乗仏教の大学者となった兄弟がいました。兄、無着の『摂大乗論』を弟の天親が『摂大乗論釈』で解説しています。その中に、本当の「さとり」、涅槃に至った仏教的人格のあり方を「無住処涅槃」と呼びました。

つまり、涅槃（ねはん）（さとり）を得たならば、その人は、自利といい自分の救いの利益を得ますから迷いの世界にはいません。しかし、迷い苦悩する人の救いの利益が心配になりますから、涅槃の世界にも止まっていません。まことの涅槃とは、自分だけのさとりにも止まることなく、また、迷いの中にも止まらないという、住処無きあり方だというのです。

仏教の目指す本当の涅槃、すなわち人格態度とは、自分と他者の生き方が気になるような、自利利他の双方が具わるような新しい生き方が生まれるといえるでしょう。新聞を読みながら、社会の出来事に私とすべてのいのちが繋がっている大きな海原が、私たちの眼の前に広がって見えてくるような生き方をしたいと切に願わずにおれませんでした。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後六時半の法話会「ナムの会」で『正信念仏偈』を、第三日曜午後六時半の「聖典勉強会」で『親鸞聖人御消息集』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料･茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と八月は休会し、十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります。「聖典勉強会」は八月と十二月は休会し、その他、行事によって休会があります。

相手の成長こそ、わが人格成長
～利他のこころ

●フィギュアスケートの拍手喝采

ソチオリンピック・パラリンピックの余韻の残る2014年3月末、さいたまスーパーアリーナで「世界フィギュアスケート選手権大会2014」が開催されました。知人が観戦に行っていたため、私はとても親近感を持って、テレビを観ていました。

テレビの画面からも、音声からも、観客が音楽に合わせて手拍子を打ったりしていることがよくわかりました。また、選手が難度の高い技を決めると、どよめきが起きて、大きな喝采とともに拍手が巻き起こる様子がわかりました。そして、特に印象的だったのは、転びそうになったり、小さなミスをした直後に、会場全体が、その選手を支えるような手拍子や、健闘を讃える拍手を盛んに送っていることでした。

この「自分が応援する選手であるかどうかという立場を超えて、その選手の今までの精進努力を讃えよう、そして、その日の演技を支えよう」というあり方に、私は少なからず感銘を受けました。

●「格差」は閉鎖された連鎖の虜（とりこ）?

同じ3月末に「学歴・収入で子に学力差」という、大変ショッキングな報道を目にしました。そこで、東書Eネットの教育・文化ニュースに掲載されている時事通信の報道（枠内記事引用）を通して考えてみました。

学歴・収入で子に学力差＝勉強習慣、親の関与も影響―学力テストで分析・文科省／2014年3月28日

両親の学歴や世帯収入が高いほど子どもの学力も高い傾向にある一方、家庭環境にかかわらず宿題をする子も学力が高いことが、昨年4月の全国学力・学習状況調査（全国学力テスト）を基に実施した文部科学省の委託研究で28日、分かった。収入が増えるにつれ塾代などの学校外教育費支出が多くなり、子どもの正答率も高まった。

経済力など家庭状況と子どもの学力との関係を全国規模で調べたのは初めて。親が子どもに本や新聞を読むよう勧めたり、読み聞かせしたりすることも学力に強く影響していた。

研究グループの代表で、お茶の水女子大の耳塚寛明教授は、家庭環境による学力格差を克服する上で鍵となる取り組みを示しているとした上で、「学校や家庭でこれらに配慮をした指導を広げていくことが必要だ」と話している。

昨年5～6月、全国から抽出した公立小中778校の保護者計約4万人に家庭の状況や教育費、子どもへの接し方などを尋ね、学力テストの正答率との関係を分析した。

学歴と収入を数値化した「社会経済的背景」で4グループに分けた結果、上位ほど平均正答率が高く、グループ間の差は各教科で最大12．9～23．9ポイントだった。子どもの学習時間の長さや保護者の意識、接し方も正答率と相関していた。

社会経済的背景は低くても成績が上位4分の1に入っている子どもの特徴として、読書や読み聞かせのほか、(1)生活習慣が整っていて学習習慣が身に付いている(2)保護者が子どもと勉強について話したり、学校行事に参加したりする―などが挙がった。

◇家庭状況と平均正答率（世帯収入と親の学歴でグループ化し比較）

	上位	中上位	中下位	下位
【小6】				
国語A	72．7	63．9	60．1	53．9
B	60．0	51．4	46．1	39．9
算数A	85．4	79．2	75．2	68．6
B	70．3	60．3	55．1	47．7
【中3】				
国語A	83．6	78．6	75．2	70．7
B	76．7	70．3	66．0	59．8
数学A	75．5	67．5	62．0	54．4
B	55．4	44．9	38．8	31．5

それによれば、「両親の学歴や世帯収入が高いほど子どもの学力も高い傾向にある一方、家庭環境にかかわらず宿題をする子も学力が高いことが、昨年4月の全国学力・学習状況調査（全国学力テスト）を基に実施した文部科学省の委託研究で28日、分かった。収入が増えるにつれ塾代などの学校外教育費支出が多くなり、子どもの正答率も高まった。」といいます。

有名大学に進学するには、親の学力と共に、その経済的な背景が大きな要因の一つでもあるのだと、漠然と思っていましたが、こうして、いくつかの因果関係が研究の数値で明らかにされると、改めて考えさせられます。

学力の高いことが、両親の経済的な収入の高さに関わりを持つならば、この連鎖は、やがて、その子どもの世代、さらにその子どもの世代へと続いていくことになるかもしれません。もしそうだとすると、学力の高い環境に生まれた者は、そのまま、学歴と世帯収入が高い生活を継承していくことになります。

またその逆に、学力の高くないことが、両親の経済的な収入の低さと関わりを持つということになるならば、これもやがて、その子どもの世代にも、その連鎖が続いていくことになるかもしれません。

つまり、学歴の高くて、収入の高い家庭環境に生まれた者のプラスの連鎖はますますプラスに向かって深まり、逆に、学歴の低くて、収入の低い家庭環境に生まれた者のマイナスの連鎖はますますマイナスに向かって深まるということになりかねません。そこには、経済格差と学力格差が、重なり合っていくということになるわけです。

同じ時事通信の報道によれば、この研究グループの代表のお茶の水女子大学・耳塚寛明（みみづかひろあき）教授は、こういう学力格差を解決していくためには、「学校や家庭でこれらに配慮をした指導を広げていくことが必要だ」と指摘されています。

学校や家庭で、こうした「格差」の問題について考えていくことは、ほんとうに大切なことだと思います。しかし、それはさらに、私たちの社会そのものの意識や、日常のものの見方や発想にまで広げていくことこそ大切ではないかと思いました。

●回向（えこう）の精神

お釈迦様の因果の教えが、その後、展開していくうちに、やがて、善い行いをする者は善い報いを得て、悪い行いをする者は悪い報いを得るという形で、だんだん強調され、偏って受けとめられます。すると、善い行いをする者はますます善い報いを得ますが、悪い行いをする者はますます悪い報いを得て、その善と悪の「格差」の連鎖は大きくなるばかりです。

それに対して、大乗仏教の中で菩薩の自利と利他の教えが展開していくのと重なるように、回向の思想が重要視されていきます。回向とは、回し向かわせると書くように、自分の積んだ善行の功徳は、自分だけに止めないで、他の人びとに回らせるということです。すると、「宿題」とは、他者から回向されたものといえるかもしれません。

私だけが、「さとり」を開けば終わりだという自利のみの生き方は、たいへん閉鎖的なあり方に止まります。私のまことの「さとり」は、皆の人もまた、まことの「さとり」を開くということで完成するという利他の生き方が、ここから展開したのです。

それは、本当に優れた教員とは、自分の学力能力が優れているだけでなく、相手である生徒にどれだけそのことを伝えられたか、相手がどれだけ成長したかということで決まると言ってもいいでしょう。自分だけ、学力能力が高ければよいという発想からは、「格差」を問いにする生き方は、なかなか生まれないと思います。

自分が本当の仏教的な人格主体を成就するとは、それによって相手もまた本当の仏教的な人格主体を成就するようにならなければ、自分のまことの「さとり」が開いたとはいえない、ということを自利と利他を根本の理念とする大乗仏教の菩薩道では、重要視します。

そうした、回向の精神が、一般の人びとに浸透していくと、仏教の教えの広まるところには、菩薩的な、相手の立場に立ってものごとを考える、慈悲ある生き方が生まれていったのだと思います。

亀井鑛（ひろし）先生の『聞法100話』（法藏館）に次のようなエピソードがありました。「1964年東京オリンピックの男子バレーボール、日本対ブルガリア戦を台東区の小学生たちが見に行った時、日本チームを応援しようという先生に対して、子どもたちは言下に、日本ばかり応援するのは不公平だと抗議、さらに終盤、日本優勢になると、期せずして『ブルガリアがんばれ!』と連呼。先生は、『あんなこと、教えてもいなかったのに』と、驚き、深く感動したという新聞記事があった」と書かれていました。

自分の国を愛せよという狭量な教えを超えて、「いのち」あるものが連帯し合える道理に、子どもは素直に、分別を超えて呼応したのでしょうか。私の周りにある姿に、私の生き方を反省したり、教えられたりする所に、相手の立場に立つ回向の心が育つと思えてなりません。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後六時半の法話会「ナムの会」で『正信念仏偈』を、第三日曜午後六時半の「聖典勉強会」で『親鸞聖人御消息集』を学びにいらっしゃいませんか?　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。

「ナムの会」は一月と八月は休会し、十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります。「聖典勉強会」は八月と十二月は休会し、その他、行事によって休会があります。

輝きに感銘してしまう私
～仏法聞き難し

●築地本願寺のステンドグラス

4月の下旬、だいぶ陽が長くなった夕方5時頃、故・伊東忠太博士設計のインド風建築で有名な築地本願寺の本堂外陣の椅子に、しばらく、ただ座っている時間がありました。

築地の寺に生まれ（1957年）育った私にとって、築地本願寺は遊び場であり、やがて、聞法求道（もんぽうぐどう）の場にもなりました。朝の勤行の凛とした空気、昼の法話会の穏やかな時の流れ、夜の雅楽のお稽古の親密感など、いろいろな雰囲気の本堂で何十年も過ごしました。

その本堂に座りながら、天井脇の明かり取りの窓ガラスから差し込む夕陽が、なんとも豊かな広がりをもって、まるでシャワーのようにステンドグラスに降り注ぐ様子を私は見上げていました。寄贈された1970年当時、東洋一といわれた西ドイツ製のパイプオルガンで誰かが仏教讃歌を奏でていて、その響きに私は身を包んでいました。定期コンサートとは違い、私以外、誰も参拝の人がいない本堂で、このような巡り合わせになったことを、ゆっくりと味わいながら、自分はあと何回、このような光景に遇（あ）えるだろうか、とまずは思いましたが、いや違う、このいっとき以外に、私の生きる時間はどこにもないのだと、日頃聞いている仏教の時間論を頭の中で確認したりしました。

そして、ここにお参りして育てられたように、このお堂で私に先立つ多くの方がたが、み教えを聞き、念仏を称えることで、心が育てられ、新しい仏教的な人格が育てられたのだろうなと、短い時間、春先の軽い雰囲気の中、「こころ」は深く感銘していました。

●青い空の下には

それから1週間ほどして、ふと、尾畑文正先生（同朋大学特任教授）の言葉を思い出しました。先生は、若い頃、インドやネパールに何度も旅をするうちに次のことを考えさせられたと言われます。彼の地の海岸で大空を見上げながら、心臓と波の音が重なり合い、大地と自分の「いのち」が溶け合う安定感を「善きこころとして肯定することはあっても、そういう「こころ」に疑問をもつことはありませんでした。」と言う先生は、次の出来事に出遇うのです（『歎異抄に学ぶ～共生の原理を求めて～』明石書店、223頁～）

> 「このポカラでいままでのぼくの旅のあり方を根底から問いただされることになりました。略。ネパール人のアカルさんは、真剣な顔をして、深いため息をついて、今度、生まれてくる時には、もっと恵まれたものとしてこの世に生まれてきたい、と今生この世の夢ではなく、ネクストライフ、次の生での夢を語ったのです。まだ二十代後半の彼の口からこんなにも深い絶望と諦めが語りだされるとは思ってもみなかったぼくは、大変なショックを受けました。旅人から見ればただもう美しくてのどかなだけのポカラの地にもまた、私たちと同じ人間が、悲しみに盈ちて生きているという、いわれてみれば全く当たり前のことなのだが、ぼくの自然との一体感を求める「こころ」がその現実を見抜く眼を妨げていたのです。
>
> つまり、自然と一体感を味わって手放しで感動できたのは、ぼくが人間の現実に無頓着で、その現実を自分のこととして見ていなかったからだということなのです。このような独りよがりの感動は、私たちを現実から逃避させて、他者からも、世界からも自分を切り離して孤立させます。そういう感動は、民衆の叫びに呼応する「こころ」ではなかったのです。他者と世界から切り離され、民衆の叫びを無視するところによって成り立つ、感動する「こころ」だったのです。抑圧された人々の苦しみ悲しみを無視することにおいて成り立つような感動は、それ自身が抑圧するこころ、差別するこころです。その意味では、自分の現実を抜きにして、念仏申して踊躍歓喜しようとすること自体が問われなければなりません。」

本願寺での出来事は、私の喉の奥に小さなトゲのように刺さっていて、時々、私が何かを呑み込もうとする度に、チクチクとこのことを問いかけていたのだと思います。

●おせんべい屋さんの「おまけ」

築地本願寺で、窓からの夕陽とオルガンの響きに出遇った同じ夕方、築地から地下鉄で3駅の人形町駅の近く、水天宮の斜め前にある「三原堂」という老舗のせんべい店に行きました。塩や海苔や醤油など、みりんの甘さのない、さっぱりしたせんべいがあります。バラで、何枚か選んでいると、1枚を土間に落としてしまい、ビニール袋の中で割れてしまいました。

落とした1枚も一緒にして、選んだ商品を籠に入れてお勘定をお願いすると、中年の女性店員が割れたせんべいを取り替えようとしました。自分で落として割ったから、そのままでいいと申し出ると、いや、割れていない方がいいんだから、というようなことを言いながら、新しい1枚と取り替えてくれました。せんべいを紙袋に入れてくれるのですが、最後に、割れたせんべいを、はい、おまけ、と言って入れてくれました。

うーむ。その鮮やかな、というか、気っぷの良い応対に、それまで、さんざん店員さんと会話をしていたにもかかわらず、ありがとう以上の何も言えませんでした。そして、「負けるが勝ち」とは、こういうことだと深く肯（うなず）きました。「おまけ」ですから、先ずはお店が負けたんです。でも、結果として、完膚なきまでに負けたのは私の方です。いやそれも、せんべい屋の店頭で、こんなに気持ちよい人同士のやり取りがあったのだということや、分別の作る損得という計らいを超えて相手の「いのち」と響き合う、つまり、一元的につながり合う大きな感銘という「おみやげ」まで貰っていたようです。

私は、確かに、私を育んでいる大きな自然の恩恵によって、この身を恵まれました（生得的）。まさに、「人身受け難し、今すでに受く」（礼讃文）です。

しかし、それだけでは私という容れ物（ハード）を充分に納得できる生き方になりません。私は、同時に、私はさまざまな因縁によって生かされているという道理の教え（ソフト）によって、私の「いのち」に気づかされ育てられてきたのだと思いました（学習的）。まさに、「仏法聞き難し、今すでに聞く」（礼讃文）です。

この夕方の一連の出来事は、私の狭いモノの見方を打ち砕き、しかも、決して経済的なリスクマネジメントというような理屈に収まらない、広やかな生き方を今一度考えさせてくれたように思いました。この「おみやげ」は、こうして原稿にまで残り、もしかしたら、これをお読みになる皆さまの心にも何かが届いたのではないでしょうか。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後六時半の法話会「ナムの会」で『正信念仏偈』を、第三日曜午後六時半の「聖典勉強会」で『親鸞聖人御消息集』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。

「ナムの会」は一月と八月は休会し、十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります。「聖典勉強会」は八月と十二月は休会し、その他、行事によって休会があります。

反戦・非戦、そして悲戦
～これからも美術館へ行こう

●『日曜美術館』が好き

趣味は、その人の個性や生きてきた背景と重なり合いますので、「いい趣味」とか「悪い趣味」などと、一概には決められません。もともと、異なる人格の人間が生きているのが私たちの世間、社会ですから、お互いを認め合うのは、大変難しいことです。それでも、自分を認めてほしいからこそ、相手の存在を認めるようにしたいと強く思います。

私は子どもの頃から絵を描くのが好きで、自ずと美術鑑賞の趣味を持ちました。その趣味を満たすテレビ番組に、1976年4月から放送されている『日曜美術館』（NHK・Eテレ、毎週日曜：あさ9:00～）があります。番組後半の「アートシーン」では、各地の美術館の開催中、または開催間近の企画展を紹介してくれます。

なぜ、『日曜美術館』が好きなのかというと、番組には通奏低音のように流れる、ある基本の旋律があるからだと思っています。それは、司会者が替わっても、その番組作りの基本に、まったく明確に、“反戦”と“平和”の主張があるということです。

2014年5月18日放送の「祈りの仏画　鈴木空如（くうにょ）と法隆寺金堂壁画」では『法隆寺展』（会場：東京藝術大学大学美術館、2014年4月26日～6月22日）が紹介されました。私はその放送を観て、画壇に属することのなかった、鈴木空如という仏画師とその作品を初めて知りました。

1873年、秋田県に生まれた空如は、1898年、東京美術学校（現・東京藝術大学）に入学する前、日清戦争に従軍し、累々たる死体の上を九死に一生を得て帰還する経験をしています。卒業後、法隆寺の金堂壁画の模写と仏教美術の研究に打ち込み、生涯に三回、法隆寺の金堂の土壁に描かれた十二面の仏画を模写完成しています。

番組では、空如の没後、その画業を支えた数々の遺品が紹介されましたが、岩絵の具を包んでいた空如自筆の日記ともいえる和紙が映し出されました。そこには、第二次世界大戦の終結を知った空如が「この愚かしい戦争が終わり本当によかった」と確かな筆致で綴っていました。空如はその翌年の1946年に逝去しています。

2013年8月4日放送の「版画家　彫刻家　浜田知明（ちめい）95歳のメッセージ」では、浜田知明の銅版画が番組で紹介されました。

浜田は1939年、東京美術学校を卒業後、中国戦線に送られ、戦場の体験をもとに作成された一連の版画が、「初年兵哀歌シリーズ」（1951～54年）となりました。戦場で、相手を殺すために、自分自身が非人間的に扱われる体験をもとに描かれた銅版画には、串刺しの死体、強姦された裸体、喉元に銃口を突きつけ足指で引き金を引き自殺しようとする初年兵などがあります。

戦争を通して、仏画に精魂込めて打ち込んだ画家と、抽象的な線で前衛的な作品として残そうとする画家と、方向性は極端に異なりますが、私たちの生き方を深く捉え、そして、私たちの心の中に、あなたはどう生きるか、と問いかけるものを残していくという一点で共通するものを感じました。

●戦争と距離を保てるか

毎年、8月になると、新聞やマスメディアは、日本の侵略戦争の歴史を振り返り、そして、平和を進めるさまざまな活動を紹介し、反戦の姿勢を報道します。8月は、ひと月遅れのお盆の月でもあり、亡き人である戦没者に心が向けられる季節でもあります。

しかし、「終戦の日」である15日を過ぎると、新聞の紙面やテレビの番組などから、戦争や戦没者と向き合う内容は消えます。そして、日常に戻り、世間の出来事や、経済の金儲けや権力者の動向を気にし、反戦や社会の矛盾を作り出している自分を見つめる角度の記事はなかなか生まれてきません。

戦争中に大政翼賛会の運動に賛意を示し、国威発揚のための大本営発表をそのまま国民に流し続けた新聞社やマスメディアは、戦後、謝罪をしたり、あるいは責任者がその過ちを認めて辞職したという話は聞きませんでした。それで、毎年、8月になると、せめてもの罪滅ぼしというわけではありませんが、こうした報道姿勢が繰り返されると聞きました。

無論、真摯な態度で戦争に向き合う記者の方がたもおられるでしょうが、8月以外の新聞やマスメディアの報道姿勢には、考えさせられるところが多くあります。以下、時事ドットコムの情報（2014年5月15日付）をもとにしました。

例えば、本来、権力者には、節度ある一定の距離を持って取材活動が行われるべきなのでしょうが、2014年5月15日の官邸発表の首相動静では、安倍首相は同日午後8時6分に西新橋のすし店「しまだ鮨」で田崎史郎時事通信解説委員や島田敏男NHK解説委員らと会食をしたとのことです。同日、首相は午後6時に、官邸の記者会見で、集団的自衛権の容認を認める演説をしましたが、その直後、大手マスコミの関係者達と食事をしています。

振り返ると先の戦争中、日本の伝統的仏教教団はいずれも、軍部に賛意を示し、また、宗祖の教義を変えてまで、戦争を仏教の教えから肯定し、多くの信徒を戦地に送る積極的な行動を展開しました。私が小さい頃から、お参りしていた築地本願寺でも、兵士として出征する本願寺門主猊下（もんしゅげいか）を送る壮行会が、多くの門信徒の万歳の中で行われ、また、同寺で開催された僧侶のための講習会などに、大政翼賛会の総務や、海軍少将などが、本願寺の学僧と一緒に講義を行って、距離を持たず戦争を受け入れていました。（『資料集・戦時下の東京教区』東京教区終戦五十周年実行委員会、非売品。1996年3月20日発行。壮行会や講習会の様子が写真入りで紹介されています。）

●捕まりたくないから反戦・非戦、そして、悲戦

中国の善導大師（ぜんどうだいし）（613～681年）の言葉によれば、仏教に出遇うことは、鏡に向き合うようなことです。すると、今まで見えなかった、立派な振りをしようとしている自分の愚かさが見えてきます。すると、それによって、このままの生き方でいいのかという葛藤が生まれてきます。教えに遇わなかったら、お恥ずかしいという自分に気づかぬどころか、これで良いのだろうかという問いも生まれなかったでしょう。

お釈迦様は、「人はすべて暴力におびえる。すべての者にとって生命は愛しい。わが身にひきあてて殺してはならない。殺させてはならない」（『法句経（ほっくぎょう）』）と言われました。

殺してはならないのは、わが身にひきあててみれば、殺されたくないからです。当たり前のことですが、殺すということは、生きたまま殺すのです。それを認めることが戦争という、人殺しを人間の問題解決の手段として選ぶという「政治的な決定」です。

秘密保護法が通ったら、最初に逮捕されたいと評論家の田中優子さんが語ってましたが、私は小林多喜二（1903～33年）のように捕まりたくも、拷問も受けたくも、獄中死したくもありません。これからも美術を見て生きたいです。だからこそ、仏教者として、反戦・非戦であり、何よりも人間の悪業を悲しむ生き方、悲戦を示したいと強く思うのです。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後六時半の法話会「ナムの会」で『正信念仏偈』を、第三日曜午後六時半の「聖典勉強会」で『親鸞聖人御消息集』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。

「ナムの会」は一月と八月は休会し、十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります。「聖典勉強会」は八月と十二月は休会し、その他、行事によって休会があります。

大人に「成る」
～経験を重ね深める

●歳の差～体験がもたらすこと

二か月ほど前の話です。
「6月も終わり、もう一年の半分だね。お正月から、あっという間だったね」と小学生の子どもに向かって言ったら、
「そんなことないよ！　お正月は、ず～っと前で、そのあと、いろ～んなことがあったよ」
という、『意外』な返事をもらいました。
「大人」であるあなたは、何度か交わしたことのある会話ではないでしょうか。たいていは、大人と子どもは感じ方が違うんだよな、とやり過ごしてしまうのですが、わたしは、ふと気になり、その感じ方の向こうにあるものを考えてみました。

過ぎ去ったことに対して、受け止め方が違うから、子どもは「ず～っと前」と、また、大人は、「あっという間」だと感じるのだと思います。それは、子どもが経験し、体験している内容と、大人が経験し、体験している内容が、違うから、同じ出来事に対しても、違う受け止め方、異なった態度が生まれるのだろうと思いました。

別の言い方をすれば、経験や体験の違いにより結果として、受け止める態度にも大きな違いが生まれるということではないでしょうか。つまり、経験や体験が、人間の物の受け止め方を変えるということだろうと思います。

その経験や体験がまだ無いもの、つまり、子どもには、大人の受け止めかたを想像することができないし、逆におかしなものの見方だと思うでしょう。けれども、それを経験したり体験した大人だと、子どもの受け止め方を想像したり、あるいは、かつて自分もそうだったと振り返り、相手を責めることなく、いずれ相手も経験や体験を通して変化･深化していくだろう、と考え直すことができるように思います。

●セカンドハラスメント～何が問題なのか

2014年6月18日、東京都議会本会議で、「自分が早く結婚したらいいじゃないか」、「産めないのか」という、複数の発言者の「ヤジ」があり、それに対する都民からの抗議が数多くありました。さらに、これはセクシャルハラスメント（性的嫌がらせ）の段階ではなく、性差別であると海外メディアなどで報道されました。

当初、発言を否定していた議員が世論の高まりを受け発言を認めましたが、「ヤジ」の内容についての処罰もなく、責任も取らず、そのまま、東京都の公務員として議員を継続しています。また、都議会は、その他の発言者の特定も、また、問題点はどこにあるのかも明確化せず、先の議員が「謝罪」することで、問題の幕引きとしているように思えます。

嫌がらせ、あるいは、差別は、そうした行為が、もし起きたときには、まず、それ以上、誰かを傷つけない、つまり、二度目の差別が起こらないようにすることです。そして、そのためにこそ、誰が起こしたのかを特定して、どのように傷つけたのか、なぜその行為によって、人が傷ついたのかを、誰もが分かるように説明することが急務です。それにより、二度目の、あるいは、三度目の差別という加害を回避していく方向性を示せます。

考えると、人を傷つけたという自覚、つまり、経験を持たないときに、私たちは平気で人を傷つける行動をし、さらにそれを繰り返します。今回の「謝罪」の姿を見て、多くの人が、これでは何の問題解決にも繋がっていないし、被害者に負担をかけているのではないかと感じたのは、自覚をして経験を共有しないなら、再発防止に向けての意味合いがまったくないと、私たちはそれぞれ想像し、類推することができたからだと思います。

私は人を傷つけた、あるいは、もう一歩踏み込んで、私は人を傷つける可能性をまだまだもっている、という自覚経験をもって向き合うことがなければ、こうした出来事は再発され、「ヤジ」に問題がなかったかのように、今日も、明日も繰り返すことになります。

●「信心」も「さとり」も宗教体験

浄土真宗本願寺派･栃木県慈願寺のご住職、池田行信先生の「こころの電話」（1981年11月）から、一部分を引用します。これは、サリドマイド禍で生まれつき手のない実在の女性をモデルとした松山善三監督の「典子（のりこ）は、今」をもとにした法話です。

> 墨をする。ごく自然な動作であるが、筆をとると、それが足であると驚く。西瓜を食べる。娘のスプーンを使う足をタオルでふき、そのままそのタオルで母親は自分の顔のあせをぬぐう。松山善三監督作品「典子は、今」のひとこまである。
>
> 足をふいたタオルで顔をふく。そこには常識という眼にならされた者の「驚き」がある。この「驚き」は「好奇の眼」でもある。障害者は常にこの「好奇の眼」の環視（かんし）の中にある。「驚き」の意味を知らないで、平気で他人を踏みつけてしまう。
>
> 踏みつけてはじめて、自分の「驚き」は、相手にとっての「悲しみ」であることに気付く。「驚きをたてる」ことは、生命（いのち）の不思議を感ずることである。
>
> 人は「驚き」において「生命との出会い」を体験する。「驚き」の中に、求めて止まぬ生命を発見するとき、人はその生命に感動し、その生命を友と感じ、人格として認むる。
>
> 手や足に「驚く」のではなく、生命に「驚きをたてる」こと、即ち「生命への共感」こそが人間相互理解の基（もとい）である。

最後に、念仏の「信心」体験を得た、北村金次郎さんの逸話です。自分より数ヶ月早く仏法を聞き始めた奥さんと話が合わなくなったので、奥さんが聞法（もんぼう）している真宗僧侶の講師の先生に相談すると言下に次のように言われたそうです。

如来様の眼を通して世間を見るようになった者、つまり、信心という体験を通した者と、世間の眼を通して見ている者では、同じものを見ても、まったく違って受け止めているということです。話が合わなくなって、ある意味で当然のことでしょう、と。

私はこう思いました。経験をした人は、経験していない人の眼差しを、下に見るのでなく、かつての自分の姿であったという思いを通して共有しあうことができるのではないでしょうか。しかし、それは相手に妥協するのではなく、経験に基づいて一人ひとりのいのちを丁寧に見つめる新たな仏教的な人格の視点を生きるということだと思います。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後六時半の法話会「ナムの会」で『正信念仏偈』を、第三日曜午後六時半の「聖典勉強会」で『親鸞聖人御消息集』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料･茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と八月は休会し、十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります。「聖典勉強会」は八月と十二月は休会し、その他、行事によって休会があります。

「聞き流すこと」と「聞き届けること」

●ただ、聞き流すだけ?

テレビ、ラジオやインターネットを通して、「ただ、聞き流しているだけで、いつの間にか外国語が身につきます」という、いろいろな語学学習教材の広告が毎日届いてきます。

ある会社は「この外国語教材は、ただ流して聞くだけでいいんです」といいます。また、別の会社では「赤ちゃんが言葉を覚えるのとほぼ同じ原理です」といいます。さらにまた「音楽を聴くように、聞いているだけでいいんです」ともいいます。そして「いつの間にか、外国語が口をついて出ている自分に驚いてしまうほどです」という受講者の感想が、こうした語学学習の広告の内容かと思います。

いいなあ、とても楽だな、そんなに簡単なんだ、それでは、やってみようかな、これなら自分でもできそうかなと、つい私も思ってしまいます。

学習教材といいながらも、人びとの心に大きな印象を与えて、購買意欲を動かすことも、ある意味では利潤をあげる企業の論理ですから、それはその限りで納得できます。聞き流すことで、外国語を通して、新しい人間成長が出来るのは、素晴らしいことだと思います。

●大手マスコミが暴露できない“聖域”

湯浅次郎氏は、1975年創刊の予約購読会員制の月刊誌『選択』を刊行する選択出版株式会社の代表です。同誌には創刊以来、約40年、名物連載である「日本のサンクチュアリ」という記事があります。その内容は、「反権力で一貫」した情報で、「社会の各所に巣食う悪しき『聖域』の打破を目指し」てきました。

2010年4月号以降に連載された「日本のサンクチュアリ」25編に大幅加筆の上、2014年7月に『日本の聖域〔サンクチュアリ〕アンタッチャブル(2012年5月に刊行された『日本の聖域　偽装の国』〔新潮社〕を改題して文庫本化)』(新潮文庫)が刊行されました(別の25編を集めた『日本の聖域』は2012年11月、新潮文庫)。

米国家安全保障局の最高機密をリークした「スノーデン事件」の報道を担った、グレン・グリーンウォルド氏の『暴露――スノーデンが私に託したファイル』(新潮社)を読んだ湯浅氏は月刊誌『選択』を編集する者として、次のように書いています。

> 『「暴露が足りない。日本のメディアは何をしている。権力が抱える不都合な事実をもっと暴露せよ」。そうなじられたかのような読後感だった。」(月刊『波』2004年8月号、新潮社)

では、聖域とは何でしょうか。それについて、ジャーナリストの池上彰氏が、『日本の聖域』の末尾に「現代の聖域とは、大手マスコミが追及に及び腰になる分野のことでもあるのか」と、解説をしています。その一部をご紹介します。

> 「膨張する警察の『利権』――暴力団とパチンコがドル箱」では、警視総監たちが、天下りする構図を明かします。「暴力団追放」といいながら、ゴルフ場やパチンコ業界に警察OBが天下りしていますが、マスメディアは聖域として触れません。理由は、『記者クラブ』に属する記者たちは事実を知りながらも、記事にすると、警視庁や各県警察クラブで、特ダネなどの取材情報を手に入れにくくなるので、暴露していないことが指摘されます。
>
> 「スポーツマフィア　電通――競技団体・スポンサー・メディアを支配」では、広告代理店がスポーツ界で、したい放題の利益を作り出す様子が示されます。若い有力選手を育て、といっても金の生る木に仕立て、テレビなどで人気をあおり、肖像権商標で儲けます。広告代理店の広告収入に頼る新聞やテレビ局は、問題点を指摘する姿勢すら示せません。

こうした「聖域」について読んでいくうちに、東電などが多額の広告費用を払っていることや、そのことで広告主に発言ができなくなってしまう大手マスコミのことなどという問題を、立ち止まり立ち止まり、聞き漏らさずに学んでいく姿勢を学べます。

湯浅氏は、「大マスコミの自主規制が、権力に居心地のよい暗闇を与えている。国民の知る権利を、メディアが阻害しているのだ。」といいます。

●仏教的人格に育つ受容と批判

フォトジャーナリストのジョー・オダネル氏は、第二次大戦直後、軍人として長崎と広島に入り、自身も被ばくしながら、軍には秘密にして数多くの被爆者の写真を撮り、『トランクの中の日本――米従軍カメラマンの非公式記録』(1995 年、小学館)を著しています。

戦勝国の立場で、日本人に対して、ざまを見ろという気持ちで現地に立った彼はその後、「戦争は二度と繰り返してはなりません。原爆は決して落とすべきではありませんでした。戦争終結に必要だったと言う人がいます。でも、だれが何と言おうと、わたしはこの眼で見たのです。原爆でやられたのは、老人と女たち、そして子供たちだったのです。原爆が必要だったわけなどありません。わたしは、死ぬまでそのことを言い続けるつもりです。なぜなら、You don't forget what you saw.(見たものは忘れない)から。」と「目撃者の眼」(中学「国語」教科書、学校図書)の中で、見逃さないことの重要性を語っています。

ところで聖徳太子(574～622)には、沢山の呼び名がありますが、その一つに、豊聡耳(とよとみみ、とよさとみみ)があります。太子は一度に十人もの人々の願いを聞く機会がありましたが、全ての人が言った言葉を漏らさず理解して、それぞれに的確な返答をしたという故事から、こう呼ばれました。豊かな耳を持つお方、つまり、人びとの話を聞きながら、問題点を見逃さず的確に指摘することに優れていることで知られる故事です。

仏教的人生態度を育んだ太子の『憲法十七条』の五条には、

> 「酒席を断り、欲を捨てて、訴訟を解決しなさい。百姓の訴えは一日に千件、一日ですらこうです。永年、訴訟を治める官吏は、利益と賄賂を当たり前にして、裁決しています。それで財産の有る者の訴訟は石を水に投げるように主張が通ります。貧乏な者の訴訟は水を石に投げたら跳ね返されるように主張は通りません。こうして、貧乏な民衆は頼りにするものがありません。臣下の倫理観は欠けています。」(拙訳)

とあります。

なにげなく聞き流すことも、あるときは語学学習に役立つのかもしれませんが、私たちのいのちと直接する情報は、批判精神を持って聞こうという態度を持つことが重要だと知らされます。いのちの問題について、どうでもよいことには腹を立てず受容できるようになりたいです。また、いのちに関わる問題については、毅然とした態度で関わりたいものです。もし、そうした態度を持たずに、漫然と大手のマスメディアの報道を聞き流しているだけならば、大きな権力の潮流の中に流されることになるのではないかと思えます。

※現在の人権意識では不適切と思われる表現がありますが、原文の表現を尊重し、そのまま掲載しました。ご理解たまわりますよう、お願い申し上げます。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳(本多 靜芳)

※ご縁のあったあなた!　第一水曜午後六時半の法話会「ナムの会」で『正信念仏偈』を、第三日曜午後六時半の「聖典勉強会」で『親鸞聖人御消息集』を学びにいらっしゃいませんか?　お待ちしてます(会費はいずれも資料・茶菓代として千円です)。
「ナムの会」は一月と八月は休会し、十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります。「聖典勉強会」は八月と十二月は休会し、その他、行事によって休会があります。

「挨拶」と「平和」

●挨拶

　2014年8月11日の夕方、広島市安佐北区の歩道のない道で、信号待ちをしている車が数台並んでいました。その中の1台の乗用車の右後部座席の窓が開いているのが遠目にも見えていましたが、まっすぐ前を見ながら、その脇を歩いて通り抜けようとした時でした。小学校1年生くらいの女児が、可愛らしい声で、「コンニチハー!」と、私に声をかけました。私も、間髪を入れずに、「あらぁ!　こんにちは」と返事をしました。

　それだけの出来事でしたが、突然の挨拶に、とても心が明るく、豊かな気持ちになりました。挨拶ひとつだけで、私の心の中にいろいろなことを生みだしてくれました。

　その辺りは、大型スーパーやコンビニなども並び、都市型化した地域になりつつはありますが、まだまだ田畑もたくさん残っていて、住宅街といってしまうには、無理のある地域です。

　毎年、8月のその時期に、東京に暮らしている私は同地にある親戚の寺に、ひと月遅れのお盆のお参りのお手伝いに出かけます。初めて、広島でお参りの手伝いをした年は、昼間、あぜ道を歩いていた自分が、夜、最先端の近代空間である羽田空港にいることに、とても不思議な違和感を持ちました。しかし、最近はそうした感情の動きがなくなっていたので、この見ず知らずの女児の挨拶に新鮮な感情を思い起こしました。

●「話せば、分かる」

　同じ月の下旬、都立小金井公園（約80ha）内にある「江戸東京たてもの園」（約7ha）に行きました。ここは、現地保存が出来ない文化的価値のある江戸期から昭和初期の建物を数十軒、移築してあります。それを改修し、管理し、しかも、ボランティアの説明員を常駐させ、一般に公開している、「たてもの」のミュージアムです。それ以外にも、竪穴式住居や墳墓、昭和初期のバスなども展示しています。

　この施設の中心ゾーンにあるのが、昭和の閣僚だった高橋是清の邸宅です。二階建て和風建築に、靴を脱いで上がったとき、たまたま、他には誰もいませんでした。一段いちだんが少し高い階段を踊り場で曲がり、二階に上がると、床の間のあるたいへん広い客間がありました。隣の和室に入ると庭の見える客間にも、掛け軸のかかっている床の間がありました。すると、次の間から、「こんにちは」と男性の声がしたので、大変驚きました。その人は、解説のボランティアであることを名のって下さり、いま、私たちがいるこの部屋で、この家の主人である高橋是清が、1936（昭和11）年2月26日明け方、陸軍皇道派の影響を受けた青年将校らによって、銃殺され、刀剣で惨殺されたということを教えて頂きました。世に言う、二・二六事件というクーデターテロリズムです。

　その頃、この建物は、港区赤坂の一角（現・高橋是清翁記念公園）にありました。高橋是清は、首相も歴任し、6度目の大蔵大臣として現職（81歳）だったそうです。説明によれば、天皇の国家元首化を掲げ、軍を増強しようとする青年将校たちから見ると、高橋大臣は毎年、軍の予算案を削る、反対勢力であるという理由で、有無を言わさず殺されたそうです。いつの時代も、その命令が人間の尊厳や権利を蹂躙するものであろうとなかろうと、武力（暴力）で着実に問題解決することが、軍人に課せられた任務となります。

　1932年の五・一五事件というクーデターテロリズムで、犬養毅首相（当時）が、海軍青年将校に殺されようとした時、テロリストに向かって言った有名な言葉が、「話せば、分かる」でした。無論、その時、話し合いはなく、「問答無用」と、いのちは武力で殺されました。

『スッタニパータ』935「言い争う人々を見よ、杖（武器）を執ったことから恐怖が生じたのである。」（恐れが生じたから武器を持ったのではない）

　これは、仏典の言葉だと聞いています。迷っている私たちは、自分の作り上げた武器によって、自らの心が振り回され、具体的にお互いを傷つけ合っているのだと教えられます。

　時代は変われども、現在、ウクライナの大地で、パレスチナのガザの市街で、辺野古の青い海で、私たちと私たちの同胞は、いったいどのようないのちの営みをしているのでしょうか。

「話せば、分かる」のに、首長同士の話し合いをしなければ、傷つけ合いが生まれます。言い換えれば、話しをし、そして、知り合うと、相手は憎いけれど、傷つけたり殺したりすることはできなくなるのではないでしょうか。『ビルマの竪琴』で「埴生の宿」を歌い合った戦地の兵たちは、この仏教の言葉が深くうなずけるのではないでしょうか。

●いのちを開く挨拶

　挨拶という言葉は、仏教の禅で使われていた言葉です。「挨拶」の「挨」は、相手に向かって軽く押していくということ、「拶」は、強く確かめるということです。禅の仏道を求めようと精進修行する人びとに対して、近づき向き合って、あなたはまことの仏道を歩んでいるか、その道を開いているか、と問われ、それに対して、私はこう受け止めていると、しっかりと確かめることが、挨拶ということでした。

　そういえば、浄土真宗の盛んな石川県の山村では、つい最近まで人が道で出会うと、「後生の一大事、夜明けしたかや」という挨拶があったと、「NHKこころの時代」で松本梶丸住職が紹介されていました。つまり、「あなたは、この世で一番大切な問題である、後生の問題、つまり、いのちの一番大切な問題、念仏の信心を開くことができましたか」ということです。禅と浄土の違いはあっても、挨拶でつながり合うところがありますね。

　ふだん、自分のいのちや、ましてや他人のいのちの問題など考えることもない現代人には、そういう挨拶があったということすら、想像を絶するのではないでしょうか。

　挨拶は、今では相手とのコミュニケーションのツールという意味ですが、それは同時に、相手との関係性をさらに深め、お互いの生き方を見つめていく通路でもあります。それによって人は、いのちを認め合う、仏教的人格態度が育っていくといえるでしょう。

　広島市の安佐北区は、2014年8月20日、同じ広島市内の各地域と同時に、土砂災害に見舞われました。それによって、女児との、ほんの少しの出遇い、「こんにちは」という挨拶を交わしたことが不思議と心に刻まれることになりました。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後六時半の法話会「ナムの会」で『正信念仏偈』を、第三日曜午後六時半の「聖典勉強会」で『親鸞聖人御消息集』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。

「ナムの会」は一月と八月は休会し、十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります。「聖典勉強会」は八月と十二月は休会し、その他、行事によって休会があります。

「歌」は世に連れ、世は「歌」に連れ
～今年の流行歌

●大晦日の恒例テレビ番組、といえば?

　これは、世代によって随分と違いがありますね。私の世代ならば、子どもの頃、『紅白歌合戦』以外を見る人は、大変少なかったと思います。また、夜、11時45分からは、NHKの『ゆく年くる年』か、民放5系列の共同制作の『ゆく年くる年』を見ていました。

　これも、今の若い世代には想像できないでしょうが、民放の共同制作ということは、どの民放のチャンネルに回しても、同じ番組を放送していたのです。もっとも、最近では、チャンネルを回すという感覚も共有できないようになりましたね。

　さて、今年の流行歌、というか、ヒット曲は何かと、ネットでランキング上位50曲を調べて見ますと、2015年11月30日現在で、1位:僕たちは戦わない、2位:ハロウィン・ナイト、3位:Green Flash(以上、すべてAKB48)……。みごとに、そして、予想通り、一つも知りませんから、歌えないものばかりでした。

　2014年のランキングでも、たった一つ、名前だけ記憶に残っていたのは、『アナと雪の女王』という映画の挿入歌『Let It Go』でした。しかし、曲を歌ってみろといわれても、まったく思い出せません。

　人びとと時代を共有する「流行歌」というものがなくなってきたということでしょう。流行歌は、その時代の雰囲気を彷彿とさせてくれましたが、今、そうした「時代の共通感覚」のメルクマール(判断基準)がなくなってきたのでしょうか。

●雨を見たかい?

　団塊の世代が定年を迎える時代になりました。ですから、CCR(クリーデンス・クリアウォーター・リバイバル、1968～1972)といっても、知らない世代が増えているでしょう。

　1971年にこんな「歌」を歌っていたアメリカのロックグループで、エルヴィス・プレスリーなど、多くの有名アーティストがカバーしている「プラウド・メアリー」など、多数のヒットを飛ばしました。アメリカ南部風のサウンドを持ち味とした、いわゆる「スワンプ・ロック(南部のロック)」の先駆者的存在で、1993年にロックの殿堂入りを果たしています。

『雨を見たかい(Have You Ever Seen The Rain?)』
(Creedence Clearwater Revival, written by John Fogarty)
ずいぶん前に誰かが言ってくれた
嵐の前には静かになるって
僕は知っている、そうしてやってくるんだ
嵐が過ぎた後は、天気雨が降るのさ
僕は知っている、雨のように光って落ちてくるんだ
僕は知りたいんだ、雨を見たかい(繰り返し)
君は、晴れた真昼に降る雨を見たことがあるかい?(拙訳)

　この歌は、1970年代当時、アメリカでは、「反戦歌」として扱われ、「放送禁止」となりました。もっとも、日本でも「放送禁止歌」と呼ばれた歌がありましたが、それは、政府や法律などの規制で決められたのではなく、放送局自身が「自主規制」していたと、森達也さんは、『放送禁止歌』(光文社、知恵の森文庫)の中で明らかにしています。

　CCRのメンバーで、作詞・作曲者のジョン・フォガティは、その後26年経った1997年のインタービューで、「反戦歌のつもりで作詞したのではなかった、(彼の出身地)カリフォルニアのベイエリアでは、天気雨がよく降るんだ」と語っています。そして、CCRの解散を予感して書いたものと加えています。

　ではなぜ、お天気を歌ったはずの、『雨を見たかい』が、「反戦歌」として扱われ、「放送禁止歌」として規制されたのでしょうか。実は、ベトナム戦争への懐疑と厭戦気分が広まっていたアメリカで、「晴れた真昼に降る雨」とは、空から落とされる非人道的兵器・ナパーム弾のことなのだと人びとが受けとめたからでした。つまり、その「時代の共通感覚」が同じ歌を反戦歌と受けとめたのであり、そのような「共通感覚」があったのです。

●一水四見(いっすい し けん)

　これは、仏教の深層心理学とでもいえる、唯識の学びから生まれた言葉だと学んでいます。仏教の教えによれば、一水、つまり同じ水を見ても、四見、つまり魚(水の中の生きもの、畜生)の立場ならば「棲みか」と見え、満足を知らぬ餓鬼の立場ならば炎の燃え上がる「血の膿」に見え、人間の立場ならば「飲み物」に見え、天人の立場ならば、天から見える地上の池の水が「宝石で出来た鏡」に見えるというのです。そこからこんな戯れ歌がうまれました。

「手を打てば　鳥は飛び立つ　鯉は寄る　女中茶を持つ　猿沢の池」

　猿沢の池は、唯識を学問する奈良の興福寺の隣にあります。

　以前、「世の中には、なんてたくさんの妊婦さんがいるんだろう、と自分が妊娠してみて、はじめて気づきました」と教えて頂きました。それまでも妊婦さんはいたのに、自分の関心が生まれた時、見えてきたのです。ものごとを平等に見ているつもりでも、実は、自分の関心に合わせて見ていた、というよりも自分の都合でものごとは見えているのですね。

「あの人はいい人」、「あの人は悪い人」と、私たちは決めつけてものを見たり、考えたり、発言したりしていますが、こうして「一水四見」の教えに出遇うと、本当は、私にとって「都合のいい人」だったり、「都合の悪い人」だったのかもしれませんね。

　これは人間のものの見方ですから、そのまま、人間の作り出す社会のものの見方、歴史観にもつながっています。つまり、「いい国」「悪い国」というのも、そのまま、私の国の体制にとって「都合のいい国」「都合の悪い国」なのかもしれません。

　あるお寺の掲示板に、「憎い人など　一人もいない　憎いと思う　私がいるだけ」という言葉がありました。もしも自分の都合にしがみついていると、辛い思い、苦しい状況、憎しみ合いから抜け出せずにいるままです。

　1971年の大ヒット曲、「あの素晴しい愛をもう一度(加藤和彦・北山修、作詞:北山修／作曲:加藤和彦)」も、この視点から見つめ直すと大切なことを教えてくれているように思えます。人びとに受け入れられる歌は、同じ出来事を深く見つめる眼を大切にしていたのです。

命かけてと　誓った日から
すてきな想い出　残してきたのに
あの時　同じ花を見て
美しいと言った二人の
心と心が　今はもう通わない
あの素晴しい愛をもう一度(繰り返し)

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳(本多 靜芳)

※ご縁のあったあなた!　第一水曜午後六時半の法話会「ナムの会」で『正信念仏偈』を、第三日曜午後六時半の「聖典勉強会」で『親鸞聖人御消息集』を学びにいらっしゃいませんか?　お待ちしてます(会費はいずれも資料・茶菓代として千円です)。
「ナムの会」は一月と八月は休会し、十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります。「聖典勉強会」は八月と十二月は休会し、その他、行事によって休会があります。